



トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
 新宿三井ビル37F(〒160)
 TEL. (03)344-1701~3

Mar. 1980 No.9

第19回理事会開催

昭和55年度事業概要を決定

トヨタ財団では3月18日、第19回理事会を開催、昭和55年度の助成事業の概要が決定されました。事業概要はほぼ前年度に準じた予算規模で生まれ、その内訳は下表のとおりです。(各事業の内容については本レポート末尾「財団の事業内容」参照)

第19回理事会では、この他国際部門助成などの昭和54年度分の助成対象が決定され、また、研究コンクールの研究奨励賞候補の選考結果が報告され各候補への準備助成金の贈呈が決まりました。今回昭和54年度分として決定された助成対象は下記のとおりです。

- ・国際部門助成 7件19,080,000円
- ・「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成 7件15,000,000円

昭和55年度 助成計画額内訳表

| 項 目 | 金 額 (千円) |
|----------------------|----------|
| 1. 研究に対する助成 | 305,000 |
| (1) 研究助成 | 280,000 |
| (2) 成果発表等助成 | 25,000 |
| 2. 事業に対する助成 | 40,000 |
| (1) 国際学術研究集会助成 | 10,000 |
| (2) 「隣人をよく知ろう」翻訳出版助成 | 30,000 |
| 3. 国際部門に対する助成 | 80,000 |
| 4. フェローシップ助成 | 30,000 |
| 助 成 金 総 額 | 455,000 |

| | |
|--------------|----------------|
| ・成果発表等助成 | 5件 3,804,800円 |
| ・研究コンクール準備助成 | 20件10,000,000円 |
| 合 計 | 39件47,884,800円 |

●研究助成・事業助成の公募始まる

理事会における昭和55年度事業計画の決定に基づき、財団事務局では4月1日より研究助成・事業助成の公募を開始します。

研究助成は、「交通安全、生活・自然環境」「社会福祉」「教育・文化」の3つの領域および特定課題「地域社会の変化に関する実証的研究」を対象として行うもので公募期間は4月1日より5月31日までです。

事業助成は、国際学術研究集会助成と翻訳出版促進助成の2件で、前者は5月31日まで、後者は10月31日まで公募を受けつけております。

トヨタ財団では、他からの資金援助の得にくいもので、かつ社会的にも学術的にも有意義な活動を市広く支援できればと考えており、そのような応募をお待ちしております。これらについてのお問い合わせおよび応募用紙のお申し込みは官製ハガキによって財団事務局の各担当助成係へお願いします。折り返し応募要項等をお送りいたします。(電話によるお申込みは事務手続上、混乱しますのでご遠慮ください。)



「街と建物——明治・大正・昭和」

第1回報告会を名古屋で開催

当財団の5周年記念事業の一つとして、この2月より本年末にかけて、表記のテーマによる全国巡回報告会が計画されておりますが、その第1回(東海地区報告会)が2月23日(土)午後、名古屋市朝日講堂において行われました。東海地区に現存する明治・大正・昭和戦前の建築遺産について報告が行われ、後半では都市の魅力をいかに創造していくかに関する討論が行われました。(p.6参照)

(写真は報告を行う飯田喜四郎教授)



民間財団の研究助成

——特に科研費との関係について——

●昨年度から研究助成の公募にあたり選考基準を明記することにした。過去4回にわたる公募—申請—選考—助成のサイクルを重ね、漸く明文化した基準である。この基準では「次の各項のいくつかの点について高い評価が得られたものを選考します」として5つの項目を掲げている。その第一項は「政府の委託や助成等、他からの資金援助が得難い種類の研究であって、民間財団が助成するにふさわしい意義のあるもの」としており、これがいわば第1プライオリティーということである。

●政府(広くは特殊法人や地方自治体も含む)の委託や助成といっても、その数は無数と言ってもよく、また内容もさまざまである。しかし財団の活動と密接に関連するのは文部省の科学研究費補助金(以下科研費と略す)であろう。昭和54年度の科研費は305億円であり、これは当財団の助成金(成果発表等助成を含め3億円)の約100倍である。日本の民間財団の助成金すべてを束にしたとしてもこの1/10になるかどうかと言った程度である。民間助成財団が科研費で行う助成と同じことをやるのであれば、国の予算を1割程度増やしただけのことであり、はっきり言ってその存在意義は大したことはない。

●トヨタ財団に毎年寄せられる申請の中には科研費が切れたのでその継続や後仕末を求めてくるもののがかなりある。科研費で当然行い得る性格の研究を科研の方と同時申請しているものも多い。多額の科研費を得て研究を進めつつあるチームが更に研究費を求めてくる場合もある。その他どことなく「科研費向き」に組み立てられた研究計画がかなりの数を占める。これらをどう考えるか。これまでの当財団の助成対象の中にも実はこのような点があいまいなまま助成したのものがあるのは事実である。昨年度から選考基準を明文化したことは、この辺のことを少しずつ整理して選考の姿勢をはっきりさせねばならないことを確認したものである。昨年度の助成結果にはいささかなりともその反映が読みとれると思うが、今年は更にこの点を深く検討していく必要を感じるのである。

●誤解を招く言い方かもしれないが、要するにトヨタ財団の研究助成では科研費の助成対象となりにくい研究を優先的にとりあげたいということである。ではどのよう

なものが科研費の対象となりにくいのか? 科研費の選考方法やその考え方はそれぞれの部門によっても異なるので一般的に言うのは難しい。一つ一つの場面に応じて判断する必要がある。しかしそうは言っても議論は展開しないので敢えて科研費の対象となりにくい研究の条件をあげてみよう。^{*}

●まず、研究体制(メンバー構成)の点で多くの制限がある。大学院生や外国人の参加は難しいし、一定の大学や研究所に所属しない人が代表者として申請するのも難しい。また費用面でいくつかの制限がある。旅費とか人件費とかのいわゆる「流れもの」には費用が出にくい。そのため海外の研究者との交流などもかなり困難である。

●次に、もっと本質的な面について見れば、これは分野による違いも大きいと思うが、一般に実績主義を原則とするため成果の見通しのたみにくいもの、新しい研究分野を切り拓こうとするような冒険的な試みへの助成が得にくい。ある専門分野で実績のあがっている人がその研究を深め、広めるための費用は得られても、新しい分野に展開を計ろうとするような場合、少くともそのための初期稼働費が出ない。軌道に乗れば金はつくのである。若い研究者にまとまった研究費がつきにくいという声もよく聞く。個人的に小額の奨励研究費を得るか、さもなければ大きい組織の一員となってその分担研究を受け持つことになる。学生や大学院生では勿論共同研究者にもなれない。逆に中堅の真に優れた能力をもつ研究者が思う存分な研究をやろうとしても平等主義の原則が働いてそうはいかない。仮に研究代表者として表面上は多額の研究費を得ていても蓋を開けると多数の共同者が名前を運んでいて1人当りの使える費用は小規模なものとなる。

●色々と改善の余地はあるとしても基本的には科研費は国民の血税である。実績主義・平等主義の原則は簡単には動かし得ない。民間財団の研究助成に何らかの存在意義があるとしたら、そのような制約故に研究費の不十分な活動分野に対し、失敗や批判を恐れずに助成することであろう。

^{*} 科研費の助成内容は毎年10月に日本学術振興会から発行される「学術月報」増刊号に詳しい。財団事務局では毎年この簡単な内容分析を行っているがこれだけからは実情はつかめない。共同研究者名や費目の内訳が分らないからである。科研費の実情についてはむしろ多数の研究者からの直接インタビューに依るところが大きい。



助成刊行物紹介①

「田舎の教師」

カムマーン・コンカイ著 富田竹二郎訳
井村文化事業社刊 A 5 255頁 1500円

本書は「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成により出版された本のうちの一冊である。東北タイの辺地に赴任した青年教師が、教育に情熱を燃やしつつ社会悪にいどみ、ついに悲劇的最後をとげるという社会小説で、映画化されて評判となったベスト・セラーである。映画はソ連のタシケント映画祭に送られ、タシケント賞を受賞した。

作者は生粋の東北タイ人で、寒村の貧農の家に生れ、若くして両親を失ったが、苦学して教員となり故郷の小学校で教えた後、一貫して教育指導の仕事に努力している文部省の官僚である。また創作活動を始める以前からも、学校関係、教育関係の雑誌や会報などを対象として精力的な執筆活動を展開してきている。

本書の主人公は師範学校を出たばかりの若い教師で、自ら希望して辺地の小学校に赴任する。排他的で教育に関心のない村人達、壁もないボロ校舎、博打にうつつをぬかす校長、等の環境の中で、少しずつ努力を重ね、し

だいに生徒達から慕われ、村人達の信頼を勝ち得ていく。主人公はある時偶然にも森の中で、大規模な密伐の現場を目撃してしまう。密伐の裏にいるのは、県の役人を抱き込んで私腹を肥やす華僑の悪徳商人である。正義感の強い主人公はこの不正を黙認することはできず、密かに現場の写真を撮り、この写真を森林破壊の密伐暴露記事と共に新聞社の友人に送る。この記事がタイ国最大の新聞の第一面を派手に飾ると、激怒した悪徳商人は手下を使って秘密をあばいた主人公を探し出させ、ついに主人公は殺し屋に撃たれて死ぬ。正が邪に敗れるという常道に反した結末ではあるが、そのような内容の暗さにもかかわらず、この作品の底流にはタイ人の楽天性が感じられる。

小説としてのストーリーの面白さのほかに、この作品は東北タイ入門書としての価値がある。作者は東北タイの農民や教師の生活、文化、冠婚葬祭、年中行事などの風俗習慣、民芸細工、天然現象、動植物、料理食物に至るまで詳細な描写をしている。

訳者はそれらタイ独特の事物について翻訳するに当たって、作者のおしめない協力を得、親切な註と解説をつけている。
(若山 記)

助成刊行物紹介②

「日本近代建築総覧 各地に遺る明治・大正・昭和の建物」

日本建築学会 編著
技報堂出版刊 A 4 430頁 3000円

日本建築学会では昭和45年に日本に現存する明治洋風建築のリストをとりまとめた。このリストはその後の明治建築の研究や保存に対して重要な役割を果たしてきたが、このリスト完成の頃から大正・昭和戦前の建物が色々な面で問題となってきた。その後、日本建築学会内に「大正・昭和戦前建築調査小委員会（代表 村松貞次郎東大教授）」が設けられ、全国的な研究者のネットワークのもとに調査が進められた。

明治建築を対象とする場合と大正・昭和戦前のそれを対象とする場合では調査の方法に根本的なちがいがあがる。後者は前者に比べて圧倒的に数が多い。更に建築の種類・様式・構造等が極めて多様化する。文献や設計者の側から追うやり方では不可能である。まず現地を歩いて、見て、確認するところから始めねばならない。大正・昭和戦前の建築調査はそのような点で近代建築史研究に新しい方法を提起したと言える。今回の調査では明治建築の

再調査も行ったが、改めて発見された明治建築も多いと聞いている。

「日本近代建築総覧」はこのような調査の成果をまとめたもので、約1万5千件の建物をリスト・アップし、県別の解説を付したものである。また特に主要なもの600件に○印をつけ、取り壊しについての注意を喚起している。

従来「近代建築」という語は、古典的な様式建築に対して様式にとらわれない合理主義建築のことを言う場合もあって用語上の混乱を招くことがあったが、ここではこの用語を単純に明治以降のいわゆる「近代」に建てられた洋風建築全般という意味で用いている。これを機に用語面での整理が行われることも希望したい。

一般にこのようなリスト作成の一つの意義は、その後にリストの欠落を補う喜びを与えるという点にあらう。地域による調査密度の精粗や調査者の評価基準など、今回の調査では必ずしも統一されたものではないが、今後このリストを補足し拡充していく研究活動が全国的に展開されることを期待するのである。なお、この調査は朝日学術奨励金、トヨタ財団研究助成金により行われ、刊行は当財団の成果発表等助成によるものである。（渡辺 記）



5周年記念事業報告

“身近な環境をみつめよう”研究コンクール

研究奨励賞候補20件を選出

昨年10月15日より本年1月15日にかけて公募してきました研究コンクールは128件の多数にのぼる応募をいただきましたが、1月末から2月末にかけて慎重な選考が行われ、研究奨励賞候補20件が選ばれ、理事会に報告されました。

これらの20チームには4月から8月にかけて予備的研究を実施し、8月末に今後2ヶ年にわたって行う本研究のための研究実施計画書を提出していただくことになっております。そのため財団では各チームに一律50万円ずつの準備助成金を贈呈いたします。

今回選出されました20件の候補は右の表に示すとうりですが、これらの特徴を選考委員会での論議や研究計画の内容に照して概観してみると下記の点が指摘されます。



① 新たなテーマへの挑戦

応募された研究計画の中には、これまでの蓄積の上に展開された、ある意味で着実であり成果の見通しもたちやすいものが数多くありましたが、今回候補に選ばれたものには、むしろ新しいテーマに挑戦するような、その点では極めて冒険的であり、海のものとも山のものともつかないものが相当含まれています。

② 生活者の発想と専門家的発想の結合

生活者の素朴な環境認識と専門家の高度な科学的な考え方や研究手法が結合したような、そしてその結果独創的な性格をもつような研究計画が重視されています。生活者の立場のみで専門的・学術的な面での意義の弱いものや、専門的な立場からの興味・関心が優先して生活者の視点が十分に反映していないものは最後まで残りにくかったように思われます。

③ メンバー構成の多様性

前項の特徴とも関連し、研究メンバーの所属や専門分野などでバラエティーに富むものが多数選ばれました。これらは、必ずしも共同研究というものに馴染みにくい研究チームかもしれませんが、どのようなまとまりある研究成果を生み出し得るか、多くの不安もあります。選考に当っては危惧と期待とが相半ばしつつ、敢えて今後の

可能性に賭けたと言えるでしょう。

④ 研究資金の得にくい研究

上記①～③の特徴からもすでに明らかとなり、候補に選ばれた研究はいずれも他からの研究資金の援助が得にくいものばかりと判断しております。すなわち、文部省の科学研究費や国・地方自治体の委託などでは困難な研究です。従来の制度や仕組みではカバーしきれない分野の研究開発を意図した本研究コンクールの主旨からも当然のことと言えるでしょう。

⑤ 自然的な側面と社会的な側面

いわゆる環境科学と言われているものの内容は、多くは自然的な環境を対象として自然科学的な手法により研究を行うものですが、このコンクールでは社会的・人文的な側面の究明も重視していました。応募の中にも自然的な面と社会的な面をどう一体的に把握するかに苦心・努力の跡のうかがえるものが多数ありましたが、今回候補として残ったものは、ほとんどがそのような視点を明確にもったもののように感じます。

⑥ “みつめる”こと以上への指向

“身近な環境をみつめる”ことの意味を深めていくと、自ずから“身近な環境をどうするのか”という問題にぶち当たります。候補の中には、そのような“どうするのか”に至るまで研究の視野を広めたものが多数含まれています。しかし“どうするのか”が先走って冷静に“みつめる”ことが困難になる恐れなしとも言えません。予備的研究でその点をどのように乗り越えていくかが期待されます。



公募にあたって応募用紙の請求は700件を越えました。応募があったのは128件です。このことは応募自体がいかに困難なものであるかを語っています。財団ではこのコンクールの企画に当り、はたしてこれを実施する土壤が今の日本にあるのだろうか心配しておりましたが、公募の結果はむしろ新しい研究活動が日本の各地で胎動しつつあることを知らせてくれました。応募のあったそれぞれの研究計画はすでにこの書類を書くということを通して研究活動をスタートさせているように思われます。資金的な面での困難も多いと思われそうですがすべての計画が何らかの活動を継続して豊かな実りをもたらすことを期待しています。(久須美 記)



研究コンクール・研究奨励賞候補一覧

| コード 番号 | 応募団体名 (責任者・氏名) | 対象 都道府県 | 研 究 題 目 |
|-----------|------------------------------|------------|--|
| C 001 | 岐阜県哺乳動物調査研究会 (川崎 立夫) | 岐阜 | 岐阜県における哺乳類の生息状況とその環境の調査及び環境教育にかかわる研究 |
| C 011 | 滋賀自然環境研究会 (小川 圭介) | 滋賀 | 琵琶湖沿岸帯の水生物群集 —植物社会学的手法と水域汚染指標の可能性— |
| C 013 | (九州)健康科学研究会 (今野 道勝) | 福岡 | 福岡市と八代市近郊の農・山・漁村および都市住民の生活環境・生活形態と健康度に関する比較研究 |
| C 022 | 白根火山研究班 (下谷 昌幸) | 群馬 | 草津白根山火口湖湯ガマの水温変化と火山活動の関連について |
| C 023 | 離島の水問題研究会 (新藤 静夫) | 沖縄 | 宮古島の地下水についての水文地質学的研究, 並に地下水開発による環境影響評価—特に地下ダムによる水利用を中心として— |
| C 032 | 比企丘陵地域自然環境研究会 (土屋 清) | 埼玉 | 総合観測法による地域自然環境の調査 |
| C 045 | 武蔵野まちかど研究会 (吉崎 恵次) | 東京 | 都市の公共空間を占める諸物の実態に関する研究 —武蔵野市まちかどセンサス— |
| C 049 | 四季名古屋屋 (川本 康弘) | 愛知 | 季節感からみた繁華街の調査研究 —名古屋都心部“栄”の場合— |
| C 065 | 坂戸の環境を考える会 (早坂 忠之) | 埼玉 | 人口急増地域における共有領域の展開 —母と子の生活活動の自前性を中心に— |
| C 069 | 重信川自然環境研究会 (平井 屯) | 愛媛 | 重信川の下流域, 左岸平野部における自然環境とその変動に対する住民の意識構造の研究 |
| C 070 | 地域建築研究会: 沖縄 (原 昭夫) | 沖縄 | 沖縄における風土重視型建築の研究と実践 |
| C 077 | 都市環境研究会 (山野井久夫) | 東京 | 墨田区(南部地域)における生物相による環境診断に関する研究 |
| C 081 | 房総半島の孤島性研究会 (鈴木 晃) | 千葉 | 房総半島の孤島性とその文化の研究 |
| C 095 | 麴町, 番町老人生活環境研究会 (西田 隆男) | 東京 | 麴町・番町地域に在住する老人のより良い心理的環境をつくりだすための一研究 |
| C 099 | 奥多摩地域環境研究会 (大森 暢之) | 東京 | 東京都奥多摩町における環境教育エリアづくりのための総合的研究 |
| C 103 | 小木町生活文化振興委員会 (金子 繁) | 新潟 | 佐渡郡小木町的生活実態の研究 —間取りと道具と環境の変化に伴う追跡調査— |
| C 111 | 谷町研究会 (富樫 穎) | 大阪 | 谷町の長屋と路地におけるアメニティの発生要因について |
| C 116 | 木曾三川イタセンパラ生態保全研究会 (浅野 峻一) | 愛知 | 木曾三川のイタセンパラの生態とその環境保全に関する研究 |
| C 117 | 岩倉まちづくり研究会 (奥山 文朗) | 京都 | 岩倉方式(地域協定による土地利用計画の策定)推進に関する研究 |
| C 123 | 明日の近江八幡を考える研究グループ (西川 幸治) | 滋賀 | 近江八幡市における地域文化財を活用した個性的町づくりのための実践的研究 |



5周年記念事業案内

「街と建物——明治・大正・昭和」

全国巡回報告会

トヨタ財団では5周年記念事業の一環として、近代建築史研究会(代表 村松貞次郎教授)との共催により、表記テーマの巡回報告会を開始致しました。これは、当財団の研究助成を得て完成された「日本近代建築総覧」(P.3「助成刊行物紹介②」参照)の成果を巾広く各地の関係者に報告し、これらの文化遺産としての近代建築に対する理解を深めていこうとするものです。この報告会は(社)日本建築学会、(社)日本建築士会連合会、朝日新聞社および各開催地の教育委員会などの後援のもとに、本年2月から11月にかけて全国11ヶ所の都市で実施されます。その概要は下記のとうりです。

① 東海地区報告会 2月22日(土) 名古屋市 (済)

東海4県(静岡・愛知・岐阜・三重)及び名古屋市内に現存する近代建築についての報告が行われ、フローアからは、蒲郡・多治見・伊勢山田における実際の保存活動などの事例報告がなされた。その後、旧名古屋高等裁判所の保存に至る経緯や今後の再利用の課題についての特別報告が行われ、続いて「都市の魅力とは？」をテーマに4人の論者にもる討論が行われた。

② 九州地区報告会 3月29日(土) 福岡市

九州地区に現存する明治・大正・昭和戦前の建築遺産について報告の後、各地で公共建築の保存に携ってきた方々による事例報告・討論を行う。また、経済史研究の立場から文化遺産に対する考え方を九大の秀村選三教授にお話し頂く。

③ 四国地区報告会 4月26日(土) 高松市

四国の調査は主として関西の研究者が県別に分担して行ってきたが、今回はその報告に加え、地元で地道に調査を行って来た方々の意見もお聞きし、四国地方における今後の建築史研究の礎となるような研究交流をもつ計画である。

④ 中国地区報告会 4月27日(日) 倉敷市

中国各県における近代建築の現状について報告し、引き続き倉敷を事例として、一定地域における近代建築の発展とその文化史的な背景についての講演会をもつ計画で

ある。

⑤ 北海道地区報告会 5月27日(火) 函館市

北海道における近代建築の現状等の報告の他、主として函館を事例として港町の魅力と近代建築の役割について検討し、今後のあり方を模索したいと計画している。

⑥ 近畿地区報告会1 6月14日(土) 神戸市

兵庫県下に現存する近代建築の特徴について報告する他、特に阪神間の明治以来の住宅地開発に焦点を当て、そこに展開された近代住宅史の問題を掘り起こしていけばと計画を検討中である。

⑦ 近畿地区報告会2 6月15日(日) 大阪市

神戸市に引続いて行うもので、大阪府・奈良県・和歌山県下の現存近代建築について報告し、その後、大阪の経済的な歴史を背景とした船場を中心とする建築群について、その意味・性格・保存などを考えたいと計画を検討中である。

⑧ 近畿地区報告会3 6月21日(土) 京都市

京都府・滋賀県下の現存近代建築について報告し、その後、中京郵便局など京都市内の保存工学の実例をとりあげ、将来の保存的利用を促進するための技術的な課題について討論をもちたいと計画を検討中である。

⑨ 東北地区報告会 7月中～下旬(土) 盛岡市

東北地方に現存する近代建築についての報告の後、盛岡市をはじめとして近代建築の保存に優れた行政的実績をもつ自治体の関係者をお招きし、都市環境の創造者・管理者としての地方自治体の役割・可能性について検討したいと考えている。

⑩ 北陸地区報告会 8月中～下旬(土) 金沢市

福井・石川・富山の各県下に現存する近代建築について報告の後、近代建築の発展における地方性の問題、あるいは伝統的な環境の中に出現した近代建築がどのように地域に受け入れられたかなどの問題等について検討したいと考えている。

⑪ 東京シンポジウム 11月中～下旬(3～4日間) 東京都

これまで各地区で行われた報告会を受け、近代建築の研究や保存に関する今後の展望について広い視野から論議する機会としたい。また、東京を事例とした近代以降の景観形成の分析・評価なども考えている。(渡辺記)(参加申込は官製ハガキにて当財団、全国巡回報告会係へ)



助成研究報告会

○第7回報告会

テーマ：「日本人とアメリカ人—比較研究の意義・方法・可能性—」

日 時：昭和55年2月14日（木） 1：10～6：00PM

場 所：国際文化会館（東京都港区六本木）

プログラム：

研究報告

1. 「日米両国民の健康に関する生態学的比較研究」

帝京大学医学部教授 山本 幹夫

2. 「アメリカ人の価値意識

——国際比較の方法論的研究——」

文部省統計数理研究所第6研究部長 鈴木 達三

関連講演 「比較研究における方法論」

文部省統計数理研究所所長 林 知己夫

討 論 「比較研究の意義・方法・可能性」

司会 埼玉大学大学院政策科学研究科教授 手塚 晃

筑波大学哲学思想学系教授 井門 富二夫

東京工業大学工学部教授 岩田 慶治

東京大学教養学部講師 中山 茂

東京都老人総合研究所疫学部長 簇野 脩一

今回報告された2件の研究はいずれも統計的な手法により日・米両国民を比較しようとするものである。

報告1は既存の統計資料をもとに多変量解析を行い、様々な指標の中から人間の健康に影響を及ぼす要因を析出し、最終的にはそれに対応する形での保健モデルを策定しようとする研究である。日米比較を行うのは、環境要因などの異なる国での同一手法による分析を通じて、一国内のデータのみでは明らかにできなかったような要因構造を照明し得るとの考えに基づいている。

報告2は、統計数理研究所が作成したアンケートによる調査結果を土台にして、やはり各種の統計数理的手法を駆使して、国民性を記述しようとする研究である。ここでアメリカをとり上げているのは、この手法を通しての国際理解のための第一歩としてであり、ここに到るまでに既に過去数回の国内調査や、ハワイ調査などの実績

が積まれている。

林所長の報告では、これら両研究を概括する形で、比較研究の方法論が論じられた。すなわち、比較が成立するためには、いきなり異なるものを比較するのではなく、似ているものから出発して徐々に連鎖的に比較の輪を広げていくことが必要であること。また、仮説に固執せずに、調査分析を通して仮説そのものもたてかえていくという柔軟性が重要であることなどである。

後半の討論では、山本教授の研究については、簇野氏から、社会的要因が個体に影響を及ぼす場面では生物学的要因というミクロの問題があるはずであり、統計的なマクロのアプローチではカバーしきれない面もあろうというコメントがあった。一方、統数研の国民性調査に対しては各討論者から様々な意見がよせられたが、とりわけこのような質問紙法調査の積み重ねにより国民性を理解し得るという考え方に対し、文化人類学の岩田氏から出された、「この調査の延長線上に文化をとらえることが果して可能か」あるいは「個人を文化の最小単位とみなすことは妥当か」という疑問がひとつの大きな論点になったと思う。

この他にも様々な論点からの意見が聞かわされ、個体をサンプルとしながら個性性を捨象して全体としての傾向を記述しようとする統計的思考方と、参与を通じて具体的な事象の中に世界像を見出そうとする文化人類学的な行き方との立場のちがいがある程度浮彫りにされたように思う。(当日のレジュメの余部がありますので、ご希望の方は財団事務局までお申し込み下さい。また当日の討論の部もいずれ印刷に付したいと考えております。)

(久須美 記)

報告を行う林知己夫氏





財団の事業内容

● **研究助成** —— 「交通安全、生活・自然環境」、「社会福祉」、「教育・文化」及び「特定課題」（本年度のテーマは「地域社会の変化に関する実証的研究」）の4部門を対象に、社会的要請に対応した研究に対して助成を行うものです。例年4月から5月にかけて一般公募し、各領域別選考委員会の選考に基づき、10月に理事会で助成対象を決定。助成期間は10月15日より翌年10月14日までの1年間。助成額は年約2億8000万円。応募資格の制限は特にありません。

● **国際部門助成** —— 主として発展途上国を対象として、生活・自然環境、社会福祉、教育・文化に係わる現代社会の要請に対応したプロジェクトに助成を行うものです。公募期間は特に定めず、随時申請に応じており、国際部門委員会の選考に基づき、年3回の理事会で助成対象を決定。助成期間は決定時より1年間。助成額は年約8000万円。

● **事業助成** —— 国内・外の時代の要請に対応したプログラムを策定し、これに基づき実施するもので、昭和55年度現在下記の2件のプログラムを実施しております。助成対象はいずれも事業助成選考委員会の選考に基づき理事会にて決定。

・ **国際学術研究集会助成** 日本で開催される国際的学術研究集会に出席する発展途上国の研究者を対象に、その渡航費・滞在費を助成するものです。4月から5月にかけて公募し10月に助成対象を決定。助成期間は12月1日より翌年11月30日までの1年間。今年度の助成額は1000万円。（本プログラムは昭和55年度で終了の予定）

・ **「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成** 東南アジア諸国の文化・社会・歴史等の文献のうち、日本における翻訳出版が望まれるものについて、その促進のために翻訳料を助成するものです。例年5月から10月にかけて公募し、10月と翌年3月に助成対象を決定。助成額は年約3000万円。

● **フェロウシップ助成** —— 財団法人国際文化会館の運営する「社会科学国際フェロウシップ・プログラム」に対して、フォード財団、国際交流基金と協力して、昭和50年度以来助成を行っております。毎年国際部門委員会にて検討を行い、10月理事会にて助成を決定。助成額は年3000万円。

● **5周年記念事業** —— 昭和54年10月に財団設立5周年を迎えたのを記念して行う事業で下記の3件を行っております。

- ・ “身近な環境をみつめよう” 研究コンクール
- ・ アジアの子供劇場—東南アジア児童劇団の公演と会議
- ・ 「街と建物—明治・大正・昭和」全国巡回報告会

● **事務局の活動** —— 前述の助成活動実施に伴う関連の諸業務や今後の助成プログラム立案に必要な諸調査などの内部的活動のほか、対外的な活動として次のことを行っております。

- ・ 「トヨタ財団年次報告」の編集・発行
- ・ 「トヨタ財団レポート」の編集・発行
- ・ 助成研究報告会の開催
- ・ 国際部門セミナーの開催

〈編集後記〉——財団レポートに読者のご意見を——

▶ 前号に助成研究報告書の案内を出したら50通を超える要望があった。報告書の底をつくものもあって何人かの方にはおわび状を出す仕末となった。

▶ 報告書や当レポートの送付希望のハガキに前号の記事に関する意見が書かれていることがある。賛意であれ反論であれ、編集者にとっては非常に嬉しい。

▶ 年4回とはいえ、レポート発行にはかなりの費用と労力が要る。どのような性格とするのが最も有意義か？ 常常考え、試行錯誤をくり返してきた。

▶ 無難な報告だけでは官報みたいで面白くない。面白くするために無責任になっても困る。現実を踏えた上で、日本の助成活動の将来を考えるための議論の場とすることができれば最も良いと思う。

▶ 読者からの意見も掲載できるような自由な雰囲気のものになりたい。皆様からのご意見をお待ちしています。

（トヨタ財団レポートの継続送付をご希望の方に）

このレポートは、当財団の活動状況を広く関係者の皆様にご理解いただくために年4回発行し、ご希望の方に無料で配布しております。このレポートを継続的にご希望されます方は、官製ハガキにて財団にお申込み下さい。当方のメイリング・リストに登録し、今後引続きお送りいたします。ご登録の方には年次報告書も併せてお送りします。

トヨタ財団レポート No.9

発行日 1980年3月25日
 編集発行 財団法人 トヨタ財団
 (担当 山岡 義典)
 印刷 ㈱八重洲企画